

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Multiple Approaches to Linguistic Dynamics: Utilizing Nationwide Surveys in Combination with Large-scale Corpora

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 相澤, 正夫, AIZAWA, Masao メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00000774

言語動態を多角的にとらえる

—コーパス調査と全国調査の複合活用—

Multiple Approaches to Linguistic Dynamics:

Utilizing Nationwide Surveys in Combination with Large-scale Corpora

相澤 正夫 (AIZAWA Masao)

1. はじめに

本プロジェクトでは、現代日本語の動態を的確にとらえるため、多角的なアプローチを積極的に試すことを合い言葉に、様々な調査研究を進めてきた。参加メンバーは各自の関心領域に即したテーマについて研究発表を行い、そこでの議論を踏まえつつ自由な立場で論文の執筆を行った。2013年10月に刊行した『現代日本語の動態研究』（おうふう、以下『動態研究』と略称）は、このようにして成った多彩な論文12編を収める研究論文集である（相澤編2013）。

プロジェクトとしては、前半の成果を取りまとめた最初の刊行物になる。本書の内容については、本誌4巻3号で簡単に紹介する機会があった（相澤2014）。また、刊行から半年余りが経過した2014年7月には、日本語学会機関誌『日本語の研究』の展望号で、「語彙（理論・現代）」「地域言語・方言」「数理的研究」の三つの分野から、この論文集あるいは収録論文の意義に言及する記事が寄せられている（柏野2014、小西2014、半沢2014）。

『動態研究』は、「第1部 動態研究の実際—分析対象の側面から—」（6編）と「第2部 動態研究の基盤—データと分析手法の側面から—」（6編）の2部構成となっている。前回、2012年7月の本欄のプロジェクト紹介では、「2010年全国方言意識調査」の実施と、「方言意識の現在をとらえる」ための新たな統計分析手法（＝潜在クラス分析）の導入について紹介した（相澤2012）。『動態研究』の第2部には、この研究の増補改訂版も1編として収録されている（田中・前田2013）。

今回は、『動態研究』の第1部に収録された論文のうちから、語彙面での変異・変化（＝動態）に関わるものとして、「動詞ヒモトクの意味・用法」を扱った1編を紹介したい（相澤2013）。分析対象とする言語形式は一点に絞り込んで、大規模なコーパス調査と全国規模の意識調査を複合的に活用しながら、「言語変化の先端的現象の把握・分析」を試みたものである。「言語動態を多角的にとらえる」とはどういうことなのか、具体的な研究事例を通して、本プロジェクトが目指すところの一端をお伝えしたい。

2. 動詞ヒモトクの意味変化—〈書物を読む〉から〈分析・解明する〉へ—

ヒモトクという動詞では、〈書物を読む〉という意味の伝統用法に加えて、〈分析・解明す

る」という意味の新用法が近年になって急速に広まり、現在は両用法が共存状態にあるようだ(国広 2010)。例えば、次の(1)が伝統用法、(2)が新用法である。

- (1) マルクスまでをもヒモトク読書家 (伝統用法)
- (2) 宇宙の歴史をヒモトク気球実験 (新用法)

ヒモトクの新用法の成立は、伝統用法とどのような関係にあるのだろうか。両用法の共存に至るプロセスを明らかにし、今後の変化の方向を予測することはできないだろうか。

そこで、まず、両用法の意味論的な成立原理を確認すると、それぞれ次の(3)(4)のようにまとめることができる。

- (3) 伝統用法：書物のひもを解いたあとの「読む」という動作を間接的に表現
⇒メトニミー (metonymy, 換喩) = 近接性に基づく比喩
- (4) 新用法：「ひもをゆるめて解く」という具体的動作に基づき、抽象的な働き・精神的作用を表現
⇒メタファー (metaphor, 隠喩) = 類似性に基づく比喩

伝統用法の〈書物を読む〉は、「筆をとる (=手紙や原稿を書く)」「ミシンをふむ (=ミシンで縫い物をする)」などと同じく、先行する動作によって直後に続く動作を表現していることから、時間的な近接性に基づくメトニミーの一種とすることができる。

一方、新用法の〈分析・解明する〉は、目に見えない精神的作用のプロセスを具体的動作に見立てることによって、ありありとした表現が与えられていることから、典型的なメタファーとすることができる。「事件のもつれた糸をほどく (=解明する)」「解決の糸口 (=きっかけ)」など、同様の「見立て」による表現も容易に想起されることから、新用法を産み出す発想の素地は十分にでき上がっていたものと見られる。

ちなみに、ヒモトクには具体的な動作を表わす用法がなく、比喩を基盤とする二つの用法が現時点で共存している。具体的動作については、「リュックをヒモトク」とは言えず、「リュックのひもを解く」のように「～のひもをトク」と言わなければならない。

以上を踏まえて、動詞ヒモトクにおける意味変化の大きな流れを推測してみよう。まず、メトニミーに基づく伝統用法は、古風な文章語あるいは教養語として存続してきたが、誰にも分かりやすい日常語ではないために長期的には「衰退」傾向にあったと思われる。しかし、その一方で、「ヒモトク」という語形自体には強いイメージ喚起力があり、そのことがメタファーに基づく新用法の発生・普及を促し、この語形を現代に「再生」させたのではないか。

新用法の周辺には「トキアカス (解き明かす)」「トキホグス (解きほぐす)」などが類義語として存在し、また、「謎 (疑問, 問題) をトク (解く)」のようなありふれた言い方も存在する。「トク (解く)」という形式を機縁として、ヒモトクがこれらの複合動詞と連想・類義の関係に入り、徐々に安定した地位を築きつつあるというのは、十分に想定できる普及の

プロセスと言えらるだろう。

3. 大規模コーパスに見る伝統用法と新用法の使用実態

前節で見たように、動詞ヒモトクでは今まさに意味変化が進行中である。ヒモトクを分析対象に選べば、動詞の意味変化のメカニズムについて、一つの詳細な事例研究が成立しそうな予感がある。この好機を逃すべきではない。

あとは議論のための素材集めだが、折よく構築が完了した『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(略称：BCCWJ, 約1億語収載)を利用しない手はないだろう。BCCWJは、多様なジャンルあるいは媒体の書き言葉を収載しており、20世紀後半から21世紀初頭にかけての現代日本語の平均像をとらえるには格好の言語コーパスである(山崎2007, 前川2008)。

早速、検索をしてみたところ、ヒモトクの用例として184例が得られた。ひとまず議論に十分な用例数である。大規模コーパスの活用により、一気に用例採集とそれを踏まえた数量的研究への道が開かれたわけである。

検索結果を見よう。表1は、BCCWJから採集した総計184の用例を、「表記」と「媒体」に注目して出現状況を示したものである。(ごく最近の新媒体である「Yahoo! 知恵袋」と「Yahoo! ブログ」は「Web」として一括した。)

表1 表記と媒体から見たヒモトクの出現状況

表記 \ 媒体	書籍	雑誌	新聞	広報紙	Web	国会 会議録	計
ひもとく	73	6	4	6	5	3	97
ひも解く	5	2	0	2	1	0	10
紐とく	1	0	0	0	1	0	2
紐解く	27	2	0	1	12	0	42
繻く	30	3	0	0	0	0	33
計	136	13	4	9	19	3	184

表記の「多様性/斉一性」の観点から見ると、多様性のある書籍、雑誌、広報紙、Webと、斉一性のつよい新聞、国会会議録とに二分される。また、「紐」「繻」は表外漢字であることから、公共性の高い媒体である新聞、国会会議録では、交ぜ書きも含めて使用が避けられているように見える。さらに、実際に現れた5種の表記からは、表記と用法の関係について、次の(5)(6)のような予測を立てることができそうである。

- (5) 「繻」という表外漢字は、ヒモトクの伝統用法を知っている人でなければ使えないはずであるから、表記から伝統用法であると予測できる。
- (6) 「紐解く」は、表記面からも2形態素ととらえられやすいから、「もつれた紐を解く」

といった新用法のイメージとの親和性が高いと予測できる。

表2は、表1の区分にしたがいながら、それぞれについて「伝統用法／新用法」の内訳を示したものである。

表2 ヒモトクの伝統用法と新用法の出現状況（表記別・媒体別）

媒体 表記	書籍	雑誌	新聞	広報紙	Web	国会 会議録	計
ひもとく	64/9	3/3	3/1	3/3	2/3	3/0	78/19
ひも解く	4/1	1/1	0/0	2/0	1/0	0/0	8/2
紐とく	1/0	0/0	0/0	0/0	1/0	0/0	2/0
紐解く	19/8	1/1	0/0	1/0	7/5	0/0	28/14
繻く	29/1	3/0	0/0	0/0	0/0	0/0	32/1
計	117/19	8/5	3/1	6/3	11/8	3/0	148/36

(注) 「伝統用法/新用法」のように出現度数を表示

全体の出現状況は、伝統用法 148 例 (80.4%)、新用法 36 例 (19.6%) で、およそ 4 対 1 である。まず、「繻く」は、33 例中の 32 例が伝統用法と判定され、(5) の予測どおりの結果となった。また、「紐解く」は、伝統用法 28 例 (66.7%)、新用法 14 例 (33.3%) で、全体の平均よりも新用法の比率がかなり高く、これも (6) の予測に沿った結果となった。表記の特徴を手がかりに、用法の違いがある程度まで予測できることが実証されたわけである。

次に、表記と用法の相関も考慮しながら、実際に採集された 184 の用例を一つ一つ観察して得られた知見を見ていこう。

第一に、「伝統用法は条件節の中で使われやすい」という顕著な傾向が観察される。典型的な用例が、次の (7) である。

- (7) …いったいこの男はどこで何をしていたのだろう。そこで『日本書紀』をひもとくと、奇妙な重なりをもった人物が存在していたことに気づかされる。…（関裕二『古代史の秘密を握る人たち』2001 年）

条件節といっても、「～をヒモトケば、～」「～をヒモトイても、～」のように実際の表現形式は多様であるが、一步踏み込んで観察すると、いずれも〈読んで調べる〉という「参照モード」で使われていることに気付く。「参照モード」は、それ自体が伝統用法と認定するための手がかりとして重要であるが、同時に〈調べる〉という新用法につながる意味が読み取れる点にも注意しておきたい。

次の (8) は「歴史をヒモトク」のように動詞ヒモトクの対象物が「書物」として明示さ

れていないが、参照モードを形成する文脈の特徴をもつことから、実質的に「歴史について書かれたもの（＝歴史書、記録文書）」を対象物とすることが明らかに読み取れる例である。

- (8) …上位入賞者たちのしのぎを削る演奏が目白押しだ。過去の歴史を紐解けば、必ずしも優勝者が大成するとは限らない。…（岩城京子・前島秀国『Weeklyぴあ』2003年）

第二に、「新用法は受け身形や可能形でも用いられる」という特徴が観察される。次の(9)は受け身形で、意味は〈解き明かされる〉である。また、(10)は可能形で、意味は〈解明できる〉である。

- (9) …これはマルコムのシンボリックなパワーが白いアメリカの集合心理の中でいかに大きかったかを如実に物語っている。カシアス・クレイにとっては、このときこそ真実が紐解かれていくのを経験した最初 MOMENT だった—この後同じような MOMENT に彼は何度も遭遇することになる。…（マイク・マークシー／藤永康政訳『モハメド・アリとその時代』2001年）
- (10) …ヨーロッパやインド、中国などを旅して、モダニズムだけでは物足りないと思うようになってきた。実際に海外でオリジナルの建築に触れ、過剰装飾を構成する部品のルーツが紐解けるようになっていた。ゴテゴテの折衷建築はわけのわからない恐いものから、複雑でおもしろいものになってきた。…（小野一郎『日本怪奇幻想紀行』2001年）

新用法には、「一つ一つ」などの副詞と共に起しながら「もつれた紐を丁寧にほどいていく」といった具体的なイメージを喚起する用例も多い。単に「疑問（謎）を解く」というよりも〈解きほぐす〉、さらには人に伝えることまで含み込んだ〈解説する〉に近い意味・用法を次々と新しく派生させているようである¹。

4. 伝統用法と新用法を媒介する「歴史をヒモトク」

前節までに見たように、「歴史をヒモトク」には、伝統用法と新用法にまたがるという二面性がある。また、用例は、「～の歴史をヒモトク」が33例、「～史をヒモトク」が14例、合わせて47例が採集されており、全184例の25.5%を占める。ヒモトクの用例の四分の一は「歴史をヒモトク」ということであり、出現頻度の点でも無視できない存在である。

¹ 〈解説する〉ために取り上げる「観点」を、「～からヒモトク」という形式で提示することが多い。メタファーに即して言えば、「紐解く」という行為の「糸口」を、「～から」で表示していると見ることができる。2013年現在、Web上で検索すると、「データからひもとく 2015年までのIT市場」「社会のしくみをお金から紐解く」のようなタイトル記事が採集される。さらに、「法律でひもとく 介護事故」「力学でひもとく 格闘技」のように「～で」と共起する用例や、「マンガがひもとく 未来と環境」「写真が紐解く 幕末・明治」のように「～が」と共起する用例も採集される。いずれも〈解説する〉ための〈手段〉の意味を表示しており、新用法の変種と見ることができる。

ならば、「歴史をヒモトク」を媒介項として、ヒモトクの伝統用法と新用法の連続的な側面をとらえることはできないだろうか。ここで鍵となるのが、〈読んで調べる〉という意味が読み取れる(8)のような用例である。単に〈読む〉だけでなく〈調べる〉という意味を含意することが、新用法へと展開していく契機になったと推測されるからである。

また、歴史学の分野では、過去に起こった事柄である「出来事としての歴史(=ゲシヒテ)」と、それを調べて書き上げた「書かれたものとしての歴史(=ヒストリイ)」を区別してとらえる伝統があるが(堀米 1964: 26-38)、「歴史」という言葉のもつ二重性は、「歴史をヒモトク」という表現の解釈にそのまま当てはめることができそうである。

以上を踏まえて、ヒモトクの典型的な伝統用法から、「歴史をヒモトク」の複数の用法を経て、典型的な新用法に至る過程を順序立てて示せば、次の①～⑤のようになる。

- ① 【伝統用法】 書物を読む。
- ② 歴史をヒモトク = 歴史書を読む。(歴史 = 書かれたもの)
- ③ 歴史をヒモトク = 歴史書(記録・文書)を参照して調べる。(同上)
- ④ 歴史をヒモトク = 多様な手段で歴史を解明する。(歴史 = 過去の出来事)
- ⑤ 【新用法】 事物がどうなっているかを分析・解明する。

全体として見れば、②の「読書モード」と④の「探究モード」との間に意味・用法の飛躍・断絶があるが、その間に③の「参照モード」を介在させることによって、両者の連続的な側面がとらえられる。ちなみに、先の(8)が③の「参照モード」の用例、次の(11)が④の「探究モード」の用例である。

- (11) …木彫仏はおいそれと樹種を調べるわけにはいかないが、小原氏がおこなった膨大な調査の結果は木の文化史を「ひもとく」上に、十分すぎるほどであると思ってきた。
… (鈴木三男『日本人と木の文化』2002年)

5. 全国規模の意識調査に見る話者の使用意識の実態

BCCWJという大規模コーパスを活用した用例調査によって、ヒモトクの伝統用法と新用法の共存関係の詳細が明らかになった。これを基にして、日本語話者のヒモトクに対する使用意識の側面から、さらに両用法の共存関係の実態を探ってみるとどうなるだろうか。

2012年に実施した全国規模の意識調査では、大きく次の3項目について、全国満16歳以上の男女1,263名(男性560名、女性703名)から調査データを得た²。(調査対象者を「⇒○」のように示す。)

² 社団法人中央調査社に委託の上、同社が提供するオムニバス調査の一環として実施した。調査設計は、①地域: 全国、②調査対象: 満16歳以上の男女、③標本数: 4,188、④抽出方法: 層化副次(三段)無作為抽出法、⑤調査方法: 調査員による個別面接聴取法、⑥実施期間: 2012年2月2日～2月12日。回収数は1,263、回収率30.2%であった。

- 【1】 ヒモトクという言葉の使用度，理解度，認知度。⇒全員
 【2】 伝統用法と新用法についての使用意識。⇒【1】で「使用，理解」と回答した者
 【3】 伝統用法と新用法のどちらを先に習得したか。⇒【1】で「使用」と回答した者

まず，【1】の質問では，対象者全員（1,263名）に対して，ヒモトクという言葉を「自分でも使う＝使用」「自分では使わないが意味は分かる＝理解」「意味は分からないが見聞きする＝認知」に区分して，該当するものを尋ねた。結果は，「使用」13.9%，「理解」57.6%，「認知」17.8%となった。ヒモトクが「見たり聞いたりするし，意味は分かるのだが，日常的に使われるような言葉ではない」ことを示唆する結果となっている。

次に，【2】の質問では，【1】で「使用」「理解」と回答した人（903名）に対して，次に示すようなヒモトクの四つの用法を示して，それぞれについて「使う」「知っているが使わない」「知らない」のどれに該当するかを尋ねた。言うまでもなく四つの用法は，前節までのコーパス調査の結果に基づく考察を踏まえて設定したものである。

- ① 書物をひもとく（「書物を開いて読む」という意味で）
- ② 歴史をひもとく（「歴史について書かれた書物を読む」という意味で）
- ③ 歴史をひもとく（「歴史がどうなっているかを解き明かす」という意味で）
- ④ 宇宙のなぞをひもとく（「宇宙のなぞを解き明かす」という意味で）

結果は，「知っているが使わない」については，四つの用法とも60%台後半と大差はないが，「使う」については，①②の伝統用法と③④の新用法との間にかなりの差が認められた。そ

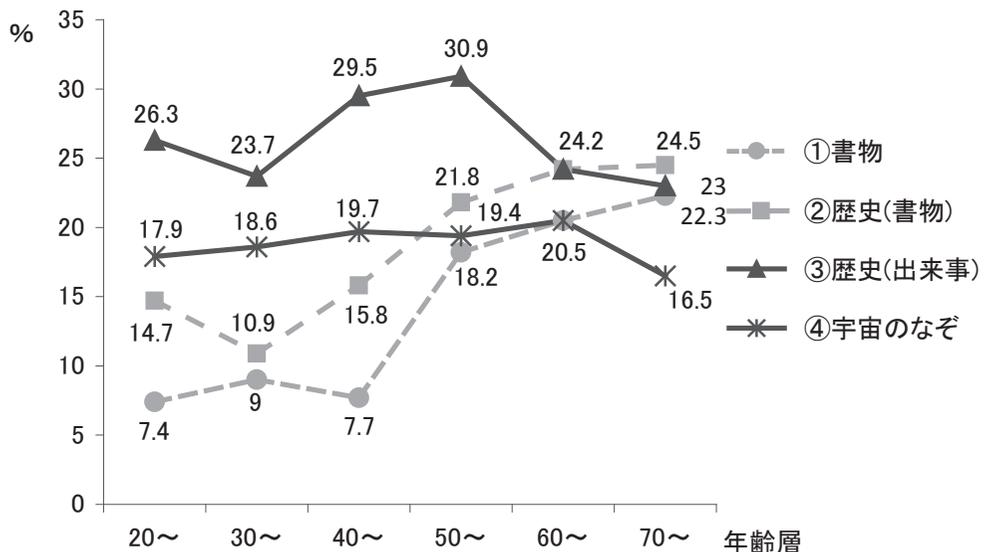


図1 ヒモトクの四つの用法の使用率（年齢層別）

こで、四つの用法の使用率の動向を探るために、「使う」と回答した人だけを取り上げ、年齢層別に全体に対する割合を示したのが、図1である。

図1を概観して、60～70代の高年層では四つの用法の使用率に大差はないが、50代以下では年齢層が低くなるにつれて、ほぼ高い水準で推移する新用法と、大きく低下を見せる伝統用法とに二分されていく様子が見て取れる。20～40代では、新用法が伝統用法をはっきりと上回っており、両用法の使用率は見事に逆転している。

さらに、【3】の質問では、【1】でヒモトクを「自分でも使う＝使用」と回答した人（176名）に対して、四つの用法の中で「初めて覚えて使ったときの使い方に近いもの」を一つだけ尋ねた。現在ヒモトクを自分でも使う人から、かつて最初に身に付けて使ったときの用法を、本人の記憶をたよりに聞き出したものである。結果を年齢層別に示したのが、図2である。

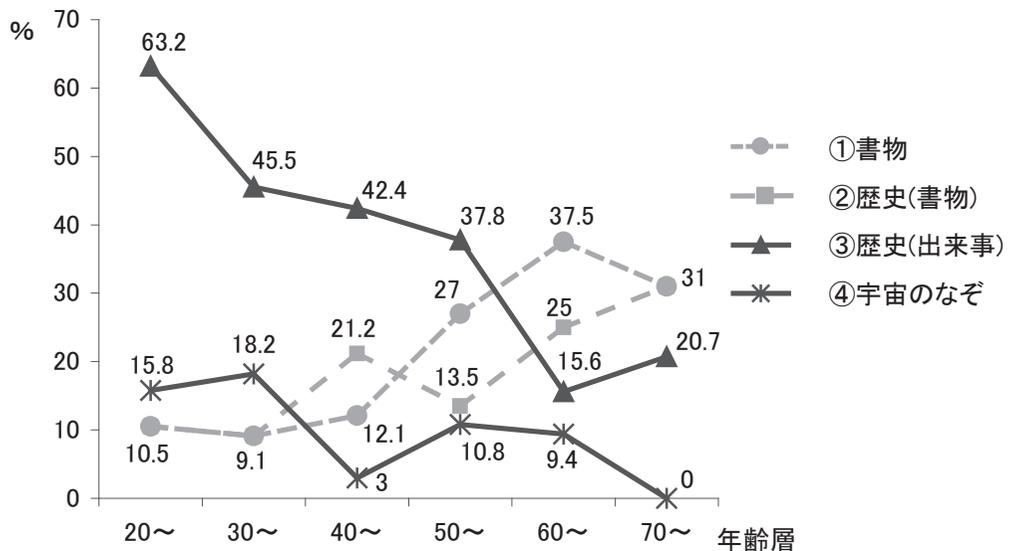


図2 ヒモトクを使う人の初めての使い方（年齢層別）

図2からは、はっきりとした傾向が読み取れる。60代以上では①②の伝統用法が③④の新用法を上回っているが、50代で③の「歴史をひもとく」の新用法が激増して四つの用法の第1位となり、以下の年代では圧倒的に強い勢力となっている。同じ新用法でも④の「宇宙のなぞをひもとく」は、70代のゼロから若年層に向けて微増を続けている。一方、伝統用法は、①②とも徐々に、しかし確実に減少していることが分かる。

若年層にとってヒモトクの意味は、第一に〈分析・解明する〉であり、〈書物を読む〉はその背後に退いている。伝統用法は、既に意識的な学習によってのみ維持される「教養語」の地位にあることを示唆する結果となっている。

6. おわりに

2010年代も半ばを迎えた現在、例えば「宇宙の神秘をひもとく神の数式」といった表現は、既に公共放送（NHK）でも実際に使用されている³。伝統用法の行く末はともかくとして、新用法の伸長には目覚ましいものがある。

本稿では、動詞ヒモトクにおける伝統用法と新用法に焦点を絞り、BCCWJから抽出された大量の用例データと、全国規模の意識調査から得られた話者の使用意識データを複合的に活用して、両者の共存プロセスを解明する研究事例を紹介した。

大量の用例データは、日本語そのものの実際使用の微細な側面を明らかにする上で有効であり、全国規模の使用意識データは、用例に基づく意味分析の妥当性を検証する上で有効である。両者を複合活用することによって、言葉それ自体のみならず、言葉を使う人の意識も考慮に入れた多角的な言語動態の研究が可能となるのである。

本稿で紹介したのは、『動態研究』の中のわずか1編に過ぎない。「コーパス調査」と「全国調査」を複合活用した事例は、他にも数編が収録されている。例えば、一字漢語サ変動詞の五段活用化・上一段活用化に関わる変異・変化については、大規模なコーパス調査による先行研究（田野村 2001, 2009）を継承しながら、新たな全国調査の実施によってその妥当性を検証した研究がある（松田 2013）。

重要なのは、コーパス調査と全国調査のような異種の調査を組み合わせた研究を企画・実施することである。二つの調査は、同一研究者が手掛けなければならないというものでもない。言語動態を多角的にとらえるためには、むしろ過去の調査研究の掘り起しが重要であることも付け加えておきたい。

●付記●

本稿は、2014年2月2日開催の「国立国語研究所 研究成果発表会 2014」(会場：学術総合センター)で筆者が行ったポスター発表をもとに、新たにまとめ直したものである。

●参考文献●

- 相澤正夫(2012)「方言意識の現在をとらえる—「2010年全国方言意識調査」と統計分析—」『国語研プロジェクトレビュー』3(1): 26-37.
- 相澤正夫(2013)「動詞ヒモトクにおける伝統用法と新用法の共存」相澤正夫(編)『現代日本語の動態研究』, 9-28. 東京：おうふう.

³ NHKが2014年3月23日にBS1で放送した「神の数式(二カ国語版)第2回 宇宙はなぜ生まれたのか—最後の難問に挑む天才たち—」のエンディング部分のナレーションに現れた用例である。「解き明かす」と言ってもよい箇所であるが、締め括りのメッセージを格調高く伝えるために「ヒモトク」が選ばれたように見える。ちなみに、同じ箇所の英語版は、“The ultimate formula will unravel the deep mysteries of the universe.”となっており、「ヒモトク」に対応する語として“unravel”が使われている。“unravel”は、〈解明する〉という抽象的意味とともに、もつれた糸などを〈解きほぐす〉という具体的意味でも使われる語である。同義語の“untangle”より硬い文体で使われることから、対応する日本語版では「ヒモトク」が選ばれた可能性がある。ヒモトクの使用における文体的な制約については、しばらく注意して観察を続ける必要があるだろう。

- 相澤正夫(2014)「〈著書紹介〉相澤正夫編『現代日本語の動態研究』』『国語研プロジェクトレビュー』4(3): 241-242.
- 相澤正夫(編)(2013)『現代日本語の動態研究』東京: おうふう.
- 半沢康(2014)「数理的研究」『日本語の研究』10(3): 101-106.
- 堀米庸三(1964)『歴史をみる眼』(NHK ブックス 15) 東京: 日本放送出版協会.
- 柏野和佳子(2014)「語彙(理論・現代)」『日本語の研究』10(3): 41-48.
- 小西いずみ(2014)「地域言語・方言」『日本語の研究』10(3): 93-100.
- 国広哲弥(2010)『新編日本語誤用・慣用小辞典』(現代新書 2033) 東京: 講談社.
- 前川喜久雄(2008)「KOTONOHA『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の開発」『日本語の研究』4(1): 82-95.
- 松田謙次郎(2013)「サ変動詞の五段活用化・上一段活用化の現状」相澤正夫(編)『現代日本語の動態研究』, 69-89. 東京: おうふう.
- 田中ゆかり・前田忠彦(2013)「方言と共通語に対する意識からみた話者の類型—地域の分類と年代による違い—」相澤正夫(編)『現代日本語の動態研究』, 194-210. 東京: おうふう.
- 田野村忠温(2001)「サ変動詞の活用のゆれについて—電子資料に基づく分析—」『日本語科学』9: 9-32.
- 田野村忠温(2009)「サ変動詞の活用のゆれについて・続—大規模な電子資料の利用による分析の精密化—」『日本語科学』25: 91-103.
- 山崎誠(2007)『『現代日本語書き言葉均衡コーパス』の基本設計について』『特定領域「日本語コーパス」平成18年度公開ワークショップ(研究成果報告会) 予稿集』127-136.

《要旨》 進行中の共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」の成果として、2013年10月に論文集『現代日本語の動態研究』を刊行した。本稿では、その中から「ヒモトク」という合成動詞の変異・変化を扱った1編(相澤2013)を紹介する。大規模なコーパス調査と全国規模の意識調査を複合的に活用しながら、言語変化の先端的現象の把握・分析を試みたものである。「言語動態を多角的にとらえる」とはということなのか、具体的な研究事例を通してプロジェクトの狙いを示す。

Abstract: As a product of the ongoing collaborative research project “Exploring Variation in Contemporary Japanese: Multiple Approaches”, we published a collection of research papers titled “Exploring Variation and Change in Contemporary Japanese” in October, 2013. This review gives a brief introduction to one of the papers, which deals with variation and change in the meaning of the compound verb *himotoku* (Aizawa 2013). The paper shows that the ongoing process of semantic change in *himotoku* has been elucidated by utilizing the results of nationwide surveys in combination with large-scale corpora, thus providing a good example of “multiple approaches to linguistic dynamics”.

相澤 正夫 (あいざわ・まさお)

国立国語研究所時空間変異研究系教授。文学修士(言語学)(東京大学)。(独)国立国語研究所研究開発部門長を経て、2009年10月より現職。

主な著書・論文：『現代日本語の動態研究』(編著, おうふう, 2013), 『外来語研究の新展開』(共編著, おうふう, 2012), 『分かりやすく伝える 外来語言い換え手引き』(共編著, ぎょうせい, 2007), 『ケーススタディ日本語の語彙』(共編著, おうふう, 1989).

社会活動：日本語学会評議員, 日本音声学会評議員, NHKアクセント辞典改訂専門委員。

基幹型共同研究プロジェクト「多角的アプローチによる現代日本語の動態の解明」

プロジェクトリーダー 相澤正夫 (国立国語研究所 時空間変異研究系 教授)

プロジェクトの概要

20世紀前半から21世紀初頭(昭和戦前期から現在まで)の現代日本語, 特に音声・語彙・文法・文字・表記などの言語形式に注目して, そこに見られる変異の実態, 変化の方向性を, 従来とは違った多角的なアプローチによって解明する。変異から変化への動態を的確にとらえるため, 各種コーパス等の新規データを最大限に活用するとともに, 対象に適合した新たな調査・分析手法の開発をはかる。併せて, 現代日本語の的確な動態把握に基づき, 言語問題の解決に資する応用研究分野の開拓を目指す。この共同研究により, 例えば, 語彙論的研究(体系・構造研究)と社会言語学的研究(運用・変異研究)の融合が促進され, 変化して止まない現代日本語の姿を多角的・総合的にとらえるための研究基盤が確立される。